

平成21年度病害虫発生予察指導情報

対象病害虫：ダイズ害虫一般（カメムシ類、ハスモンヨトウほか）

平成21年8月18日

鳥取県病害虫防除所

1 情報の内容

8月7～14日に行った県内巡回調査の結果、カメムシ類の発生は平年に比べてやや少ないが、予察灯への総誘殺数は平年並である。気象の1か月予報から、今後本種の増殖に好適な条件になると予想されるため、基幹防除を徹底する。

一方、ハスモンヨトウは平年並の発生である。気象の1か月予報から、今後本種の増殖に好適な条件になると予想されるため、8月下旬以降、被害葉が増加することが懸念される。本種の常発地では、引き続き今後の発生状況に注意し、早期発見、早期防除に努める。

2 発生状況

【カメムシ類】

- (1) 巡回調査（東部4地点、中部3地点、西部4地点）の結果、発生ほ場率は12.1%（H12～20年の平均値：43.5%）、25株当たり平均成幼虫数は0.7頭（H12～20年の平均値：1.3頭）で、平年に比べてやや少ない発生であった。
- (2) 8月上旬現在、予察灯への総誘殺数は平年並である。
- (3) 現在、ほ場ではホソヘリカメムシ、イチモンジカメムシ、アオクサカメムシの成虫が発生している。

【ハスモンヨトウ】

- (1) 巡回調査（東部4地点、中部4地点、西部4地点）の結果、発生ほ場率は41.7%（H12～19年の平均値：37.8%）、1a当たりの平均白変か所数は0.1か所（H12～19年の平均値：0.3か所）で、平年並の発生であった。
- (2) 現在、ほ場では若齢～老齢幼虫が発生している。
- (3) フェロモントラップ調査の結果、7月第1半旬～8月第2半旬までの成虫総誘殺数は平年並であった（表1）。また、フェロモントラップの誘殺消長から、8月下旬頃に再び白変葉が増加し始めると予想される。

【その他】

一部ほ場では、ウワバ類などチョウ目害虫の発生がやや多い。

表1 フェロモントラップによるハスモンヨトウ雄成虫誘殺数の推移

月・半旬	鳥取市橋本（農試）		鳥取市河原町		湯梨浜町	
	H21	平年	H21	平年	H21	平年
7・1	53	19.7	55	24.8	250.0	105.6
7・2	58	25.3	56	26.3	180.3	72.9
7・3	56	25.1	63	30.0	129.4	53.6
7・4	50	24.1	57	32.0	79.3	95.5
7・5	18	15.2	19	20.3	58.6	126.4
7・6	7	23.5	6	25.8	42.3	195.5
8・1	5	27.0	0	67.8	58.4	152.9
8・2	39	29.0	7	90.8	110.7	177.2
計	286	188.9	263	318.0	909.0	979.4

注) 鳥取市橋本は乾式トラップ、その他の地点はファネルトラップ。
鳥取市橋本、湯梨浜町の平年は過去10年間の平均、鳥取市河原町の平年は過去6年間の平均。

3 防除上注意すべき事項

【カメムシ類】

カメムシ類と紫斑病の同時防除を原則とし、以下のとおりとする。

《紫斑病に水和剤を使う場合》

- (1) カメムシ防除にネオニコチノイド系殺虫剤を使用する場合
- ・開花期後30～35日(全体の花が終わった時期)の1回防除を基本とし、紫斑病防除薬剤(アミスター20フロアブルの2,000倍)とカメムシ防除剤(ダントツ水溶剤、スタークル顆粒水和剤のいずれかの2,000倍)の混用で100 μ g/10aの薬液を散布する。なお、展着剤を必ず加用する。
 - ・カメムシ類の発生が多い場合は、前回散布の10日後に、カメムシ防除剤(ネオニコチノイド系以外の水和剤あるいは粉剤)を散布する。
- (2) カメムシ防除にネオニコチノイド系殺虫剤以外の剤を使用する場合は、2回防除を基本とする。
- ・1回目:開花期後25～30日(全体の花が終わった時期)
紫斑病防除薬剤(アミスター20フロアブルの3,000倍)とカメムシ防除剤(エルサン乳剤、スミチオン乳剤、トレボン乳剤のいずれか1剤の1,000倍)の混用で薬量は150～300 μ g/10a
なお、展着剤を必ず加用する。
 - ・2回目:1回目防除の10日後
カメムシ防除剤(水和剤あるいは粉剤)

《紫斑病に粉剤を使う場合》

- ・1回目:開花期後25～30日後 マネージトレボン粉剤DL
- ・2回目:1回目防除の10日後 トレボン粉剤DL、MR.ジョーカー粉剤DL等カメムシ防除剤

【ハスモンヨトウ】

- (1)若齢幼虫の加害によって発生する白変葉の早期発見に努める。発生初期の場合、葉の切除などの捕殺を行うか、農薬のスポット散布を行う。
- (2)防除の目安は、1a当たりの白変か所数3～5か所以上とする。
- (3)新葉の出葉により、白変葉が確認されにくいほ場が多いので、観察にあたっては、ほ場周辺からの観察のみならず、ほ場内での観察も行う。
- (4)若齢幼虫に対する登録農薬の効果は高いが、齢期が進むと防除効果が低下するため、散布適期を失しないようにする。なお、中齢～老齢幼虫が混在する場合は、ロムダン粉剤DL、ミミックジョーカー粉剤DL、ラーピンフロアブル、マトリックフロアブルなどを散布すると、比較的效果が高い。

【その他】

チョウ目害虫の発生が多いほ場では、農薬使用基準に従って防除を行う。